

青森県の遺跡地名ノート

福田友之

一 はじめに

わが全国各地に残されている地名はそれぞれさまざまな経緯をへて成立してきているはずである。そして、それぞれの地名の語源・由来が言語学・地名学・歴史学等種々の分野から検討されてきている。

ところで、これらの地名のなかに「貝塚」・「亀ヶ岡」あるいは「〇〇館」等のように明らかに考古学上の遺跡（生活痕跡たる遺物・遺構等を包蔵する地域）の所在を示したり、想起させるものがあることが古くから指摘されている。遺跡の所在がその土地の地名成立の大きな要因となっているものを、ここでは「遺跡地名」と呼称することとする。地名（遺跡名も含む）によって何らかの遺構・遺跡の所在が推定されうるものである。今まで、考古地名等と呼称されてきたものと基本的には同一であるが、遺跡が土地・地域と密接不離の關係にあることを強調し、あえてこのような「遺跡地名」と呼称することとした。

筆者の言う「遺跡地名」について、考古学的立場にたつて全国的に集成・分類を行い、その成立の歴史的背景に論及したのは中谷治宇二郎である。中谷が昭和一〇年に著した『日本先史学序史』⁽¹⁾は「遺跡地名」を論ずる上で記念碑的な意味をもつものであった。

筆者は、昭和四一年以来、青森県内外の遺跡を踏査してきているが、近年になって、遺跡の存在が地名成立と密接に結びついている事例が多いことに興味をもつようになってきた。そして、本県にも中谷が紹介した以外に、多数の遺跡地名の所在することが次第に明らかになってきた。

中谷以後、本県に関した遺跡地名の研究は、考古学研究者によって殆ど行われることがなかったという状況を踏まえ、本稿では、本県の遺跡地名を中心にして集成・分類を行い、二・三の考察をくわえることとしたいが、その前に対象とする遺跡の年代的範囲を明らかにしておきたい。

従来、考古学の対象とする遺跡は、旧石器・縄文・弥生時代、古代のものに限られてきた嫌いがあるが、近年では、中・近世さらには近代まで対象が広げられ、しかも対象とする遺構・遺物も多岐にわたってきている。本県では、近世城下町が現在の主要都市の基盤をなしており、近世考古学の対象となりうる遺構等に関する地名も多い。たとえば、城郭・寺社・町並・土木・建築その他生活関連の諸施設に関する地名があるわけであつて、この時代のものを含めると余りにも遺跡地名の対象範囲が広がりすぎ、遺跡地名としてのみ分離することが逆に地名の歴史的解釈を不鮮明にするようになるとも考えられるため、本稿では、近世以降の遺跡については除外し、中世（可能性のあるものを含む）以前の遺跡までと限定することとした。

ちなみに、現在、遺跡名を付す場合には、遺跡の所在する小字名をとつて行うことが一般的であるが、かつては通称とか遺跡付近の目印となるものの呼称・地名が付されることが多かったという点を申し添えておく。

二 遺跡地名の分類

県内には種々の遺跡地名が所在している。以下、地名成立の要因別に分類し、説明をくわえることとする。

(1) われわれが遺跡を踏査する際、最も多数目にふれるのは、時代を問わず焼き物の破片である。縄文時代の遺跡では足の踏み場のないほど縄文土器片が散布している場合が多くある。これら土器等に由来すると思われる遺跡名が津軽地方にみられる。

亀ヶ岡遺跡⁽²⁾(木造町大字亀ヶ岡字亀山・字近江野沢ほか)

カメコ山遺跡(森田村大字床舞字藤山)

カメコ山・甕子山遺跡(ともに弘前市大字十腰内字猿沢)

いずれも甕(かめ)(津軽方言での甕コ)に由来すると思われる地名である。このなかで、亀ヶ岡遺跡は江戸時代の文献に土器の出土が記されており、わが国最古の土器発見記録として著名である。すなわち、

『永禄日記』(館野越本)^{(1),(3)}の元和九年(一六二二)に

一、元和九癸亥年正月元日天氣能、

○二月弘前下鍛冶町火事、

○近江沢御城築之事相止此所城下ニ相成候ハバ亀ヶ岡と可申由、此所より奇代之瀬戸物ほり出候所也其形皆々かめ之形ニ而御座候、大小ハ御座候へ共、皆水ヲ入ルかめニ而御座候、昔より多く出候所也、昔何之訳ニ而此かめ多土中ニ有之事不相知候、其名ヲ取て亀ヶ岡と

申候也、又青森近在之三内村ニ小川有、此川より出候瀬戸物大小共ニ皆人形ニ御座候、是等も訳知レ不申候、の記載がある。

この記事は亀ヶ岡の地名由来について記したものである。土中から多数のかめ形の瀬戸物が出土するため亀ヶ岡と称すべき旨を述べている。

当地域は現在、亀ヶ岡遺跡という縄文時代晩期の代表的遺跡として全国的に著名である。かめ形の瀬戸物はまさに、縄文時代晩期の大洞(おおぼら)式土器であると考えられる。

森田村のカメコ山遺跡も縄文時代晩期の遺跡であり、弘前市のカメコ山(新・旧二ヶ所あり)・甕子山遺跡は縄文時代後・晩期の遺跡であるが、弘前市のカメコ山遺跡は現在、十腰内遺跡としての呼称の方が著名である。

津軽地方には亀岡・亀山など亀を冠する地名があり、左に一部例示する。

亀山(青森市大字小館)⁽⁴⁾

亀山郷(旧)(黒石市)

亀ヶ岡(五所川原市大字金山)

亀山(木造町大字大湯町)

亀山(森田村大字下相野)

亀岡(藤崎町)

上亀岡⁽⁵⁾(旧)(平賀町大字館山)

亀岡(田舎館村大字川部)

亀山遺跡(中里町大字亀山)

これらの地名は、前述の亀ヶ岡遺跡内に小字名として亀山があることを考えれば、断定はできないが、土器なり陶磁器出土の状況下に成立した可能性は考えてよいかもしれない。ちなみに、平賀町の上亀岡からは土器が出土し⁽⁵⁾、中里町の亀山には亀山遺跡という平安時代の土師器・須恵器を出土する遺跡がある。この遺跡はまた中里館⁽⁶⁾という中世?の館跡ともなっている。

また、中谷は相馬村大字湯口のハチモリオトスを前掲書で指摘している⁽¹⁾。このハチが縄文土器等を示すものであるとすれば、県内各地にみられる八森は鉢が出土した森の可能性はないのであろうか。ちなみに、むつ市大字大湊字浜町には縄文時代晩期の八森遺跡、同市金谷一丁目には縄文時代晩期の金谷貝塚があり、金谷一丁目には鉢森神社がある。また、天間林村大字榎林字鉢森平は二ツ森貝塚に連なる地域であり、平安時代の土師器を出土する。さらに、南郷村字八森長根には縄文時代晩期と平安時代の遺物を出土する八森長根遺跡があるのである。

また、土器にちなむ地名として、松浦武四郎は弘化元年(一八四四)、木造町の筒木坂を通り、「陶器坂なるべし。亀ヶ岡とうき坂の間の阪より、冬よりイ(凍)テ解の後に種々の瓶出る也。皆白焼手造りに七目有。上方にて行基焼(註八)ともいふべきものなり。土質不宜といへ共品は甚珍數もの有。……」⁽⁷⁾と指摘している。これは縄文土器ではなく、平安時代の須恵器か中世の陶磁器と思われるものの出土について記したものであろう。つぎに、最近成立した遺跡地名であるが、その成立過程を紹介しておきたい。

小泊村の片刈石沢の右岸段丘上の国有林内に径一五〇メートルほどの

沼がある。昭和四八年に県立郷土館職員が津軽半島西北部山塊の自然調査の際、この沼の岸から縄文時代の土器片(晩期主体、中・後期少数)と石器を発見したため、当時、無名であったその沼に「縄文沼」⁽⁸⁾の呼称を与えたわけであるが、遺跡名を付す段になって、国有林内で小字等がないため、昭和六〇年に縄文沼をそのまま冠し「縄文沼遺跡」と呼称することとし、現在にいたっている。この遺跡名の成立は、亀ヶ岡遺跡の例と全く同一の軌跡を描いているだけに、一つの遺跡地名の成立パターンを示していると解されるものである。

(2) 縄文・弥生時代の遺跡を踏査する際、土器について多数みられるのは石器・石製品である。石器製作跡の場合には、打ち剥された剥片・石片等が多数散布しており、土器片が見当たらない場合もある。この石器に由来すると思われる地名が県内各地にみられるが、それらの地名は大きく三分される。一つは矢、一つは天狗、もう一つは雷を冠するものである。矢から順に述べていこう。

石器のなかで、数が多く、しかも用途がわかりやすいものとして石鏃がある。狩猟具、時には武器・漁撈具・ドリル(穴あけ)等の用途と考えられているが、一般的には弓の矢ジリと考えられている。この矢に関する地名・遺跡名として、つぎのものがあげられる。

矢ノ根森八幡宮(佐井村大字佐井字八幡堂)

矢田遺跡(青森市大字矢田)

矢神遺跡(十和田市大字三本木字沢幅、(旧)上北郡大深内村矢神)

このなかで、矢ノ根森八幡宮は江戸時代から著名な遺跡として知られ

ている。すなわち、寛政四年（一七九二）、菅江真澄は当神社に参詣し、神社の内外、付近の民家の庭、海岸から石鏃（矢の根）が出土するため、当社をやのねもり（矢ノ根森・箭根森とも）という旨記している。⁽⁹⁾現在、当八幡宮一带は佐井八幡堂遺跡と呼称され、縄文時代前・中期、さらに弥生時代の大遺跡として著名である。そして、当境内から石鏃を二点以上持ち出すと神罰がくだるといふ伝承が残されている。⁽¹⁰⁾

つぎの矢田・矢神遺跡はともに中谷が前掲書で紹介しているものであるが、矢田付近には長森遺跡（大字宮田字長森）という縄文時代晩期の遺跡が残されており、矢神遺跡も縄文時代の遺跡であり、石鏃の出土は当然すぎることを言っている。⁽¹¹⁾

また、青森市大字大矢沢の地名も石鏃が出土したことになむと言われている。⁽¹¹⁾

県内には、矢沢の地名はほかに八戸市大字尻内町、藤崎町等にあるが、単純に石鏃と結びつけてよいものか疑問が残る。北海道のアイヌ語地名アイ・ベツは文字通り矢・川とも訳されるが、矢のように（流れが）早川と解される例もあるからである。⁽¹²⁾

なお、鱈ヶ沢町大字長平町に石火箭坂の地名があるとされるが、長平町には多数の縄文時代の遺跡があり、畑に散布する石鏃に由来したとは考えられないものであろうか。⁽¹³⁾

つぎに、天狗を冠する地名であるが、江戸時代、石器＝人工品と信じていない人々にとって、石器の使用者は神であったり、天狗であったりしたわけであるが、縄文時代の石鏃が天狗の鏃、石斧が天狗の斧、石匙（石製のナイフ）が天狗の飯匕（めしがい）等と呼ばれたことがあった。県

内における天狗を冠する地名・遺跡名のなかで、相関性の考えられるものとしてつぎのものがあげられる。

天狗平（弘前市大字乳井）

天狗森貝塚（三沢市大字三沢字後久保）

天狗平遺跡（浪岡町大字五本松）

工藤白龍が寛政二・七年に著した『津軽俗説選後拾遺』に弘前市の天狗平と考えられる地名についての記載がある。

「乳井の毘沙門堂の上の山に天狗平という所あり。爰に石の鏃斧降る事あり、俗天狗の鏃斧といへり、大円寺の境内弁慶の投たりという石の傍にも此ものあり。……」⁽¹⁴⁾

これは天狗平の地名由来に関する記録であるが、菅江真澄も「すみかの山」⁽¹⁵⁾で記している。この遺跡は、現在どの遺跡に比定されるか不明である。三沢市の天狗森貝塚は天狗森（四二・八メートル）に位置し、縄文時代早期～晩期、弥生時代の遺跡、浪岡町の天狗平遺跡は縄文時代中・後期の遺跡であり、いずれも各種石器が発見されている。浪岡町の天狗平遺跡付近には標高一七三・七メートルの天狗平山が位置しており、石器類の出土が地名成立の要因となった可能性は考えてよい。

なお、佐井村大字佐井字矢越（ここにも弓矢にちなんだ伝承があるが縄文時代の石鏃にちなんだものではない）の矢越遺跡は歴史時代の遺跡であり、遺跡内の天狗をまつる祠に出土地不明の縄文時代の石斧が二点宝物として保存されていると言われている。これも、前述したように、何らかの天狗と石斧との関連性を示していると言えよう。⁽¹⁶⁾

県内には天狗を冠した地名が多数あり、一部を左に例示するが、地名

と遺跡・遺物との関連が不明であり、また、いわゆる天狗がすむという伝承等と関連するものも多いと思われるのであって、遺跡地名と断定することはできない。

天狗平（青森市大字駒込）

天狗沢（八戸市大字是川）

天久岱（八戸市大字市川町）

天狗岳（蟹田町、標高二一八・〇メートル）

天狗岳（深浦町、標高九五七・六メートル）

天狗森（相馬村、標高四五〇メートル）

天狗森（川内町、標高五三六・三メートル）

天狗沢（五戸町字手倉橋・字上市川）

天狗森（南郷村大字泥障作へあおづくり）

つぎに、雷を冠する地名であるが、平安時代以来、雷雨の後に石器が多数発見されることが知られていた。江戸時代に入り、雷神の降らしたものとする俗説により、石鏃が雷の爪、石斧が電斧等と称されることもあった。これらの俗説と何らかの関連をもつと思われる地名は現在のところつぎの一ヶ所である。

雷（いかずち）遺跡（福地村大字吉米地字雷）

雷遺跡は縄文時代の遺跡であり、縄文土器と石器が発見されている。

雷を冠する地名は県内各地にみられ、一部を例示すればつぎのようである。

雷（弘前市大字中別所）

（南北）雷平（八戸市大字市川町）

雷（八戸市大字白銀町・大字中居林）

雷山（黒石市、標高六三九・九メートル）

雷林（碓ヶ関村大字碓ヶ関）

雷平（三戸町大字梅内）

雷平（田子町大字田子）

雷平（名川町大字鳥舌内）

これらの諸地名と縄文時代の遺跡との関連は把握されていないため、相互の関連性については断定することができない。

ところで、江戸時代において石鏃等を所持したり、神社に奉納することによって、魔除け・祈願成就が願われたとされている。石鏃が雷神の落したものであるという俗説も一方で行われている状況で、木造・茅葺の民家の多い江戸時代には、落雷・火災は大きな自然の脅威だったはずである。この落雷防止の願いをこめて、石鏃が神社へ奉納されたとしても不思議ではない。前述の木造町亀ヶ岡遺跡では土器のほかにも多数の石器類も江戸時代から注意されていたはずである。このように考えてくると、亀ヶ岡遺跡の真上に建てられている雷電宮は、まさに、そのような目的で勧請されたとは考えられないものであろうか。

(3) 縄文時代の墓地あるいは環状列石（ストーン・サークル）その他各種配石遺構に関する石神崇拜は、古代・中世・近世をへて現代に引きつがれているものもあろう。この石神信仰に関連し、各種の配石遺構等に由来すると思われる地名・遺跡名があるが、必ずしも遺跡地名と断定しうるものではないことを断っておく。

口広石神遺跡（平内町大字口広）

建石遺跡（鯨ヶ沢町大字建石町字大曲）

餅ノ沢遺跡（鯨ヶ沢町大字建石町字石神）

石神遺跡（森田村大字床舞字石神）

立石遺跡（十和田湖町大字奥瀬字立石）

これらのうちで、口広石神遺跡では縄文時代中期の土器・石器が発見された。建石遺跡は縄文時代の遺跡群であり、別に大曲遺跡と呼称されている。餅ノ沢遺跡も建石町にあり、縄文時代後期の石棺墓が検出された。石神遺跡は縄文時代前・中・晩期、平安時代の集落遺跡として著名であり、中谷も前掲書で紹介している。また、立石遺跡は縄文時代の遺跡とされている。

これらの遺跡に何らかの顕著な配石遺構があつて、それに地名や遺跡名が由来しているとは考えられないものであろうか。

立石・石神等に関する地名はほかにも左のとおり広くみられるが、これらの地域に縄文時代以降の配石を伴う未発見の遺跡等があつて、それ由来する地名が含まれている可能性はないのであろうか。

四ツ石（青森市）

立石（八戸市大字是川）

立石（八戸市大字鯨町）

立石（黒石市大字花巻）

立石（平内町大字東滝）

立石（今別町）

立石（相馬村大字藍内）

石神裏（野辺地町）

石神（六ヶ所村大字倉内）

立石（風間浦村）

なお、平内町の石神山麓国有林内には、自然石の石神様がまつられており、風間浦村大字易国間の大石神社、弘前市大字大森の大石神社はそれぞれ石を御神体とするが、弘前市の大石神社は縄文時代晩期の径五〇メートルの大環状列石の発見で著名な大森勝山遺跡に近接しているのも興味深い。

なお、若干話がされるが、岩木町大字百沢の根ノ山遺跡のある那智山権現社の御神体は、一〇余本の縄文時代の石棒であると言われている。石器をまつる祠は菅江真澄の日記にも散見され、東通村の天魔神（男根をかたどった石。「おぶちの牧」）、むつ市大字太平の三日月堂（雷斧石・長い石。「奥の浦うら」）、平内町大字狩場沢の菅大神（天神様）の小祠（陰陽石・雷斧石・雷槌石。「津軽の奥」）、平賀町大字町居の観世音（二尺あまりの雷杵¹⁷石棒がたつ。「すみかの山」）、鯨ヶ沢町の細が平の稻荷（小祠下の崖下に男根の石を並べて、幸神としてまつる。「雪のもろ滝」等が紹介されている。遺跡から出土した石器類が近くの神社に石神様としてまつられることがあれば、石神等の地名の由来となることも考えられる。

(4) 県内各地には縄文時代の貝塚が多数分布している。太平洋沿岸地域に多く、小川原湖沼群から八戸市にいたる周辺地域がとくに濃密である。この貝塚の貝類が厚く堆積している状況等によって成立したものとされる地名・遺跡名があり、県南地方にのみ分布している。

二ツ森貝塚（天間林村大字榎林字貝塚家ノ前）

唐貝地貝塚（六ヶ所村大字倉内字唐貝地）

骨沢貝塚（八戸市大字鮫町字骨沢）

笹貝沢貝塚（三沢市大字三沢字早稲田）

二ツ森貝塚は、かつて家ノ前貝塚・貝盛貝塚・天間林村貝塚・榎林貝塚等と呼称されたこともある。⁽¹⁸⁾東西約六〇〇メートル、南北約二〇〇メートルの範囲にハマグリ等の海水産の貝層ブロックが分布しており、貝層の部分が盛り上っているため、それによって囲まれた中央部がややくぼんだ印象をうける。縄文時代中期の著名な貝塚であり、貝塚の規模では本県最大の貝塚である。現在、遺跡内にバス停「貝塚」があり、住民に貝塚姓が多い。

また、唐貝地貝塚は縄文時代早期末～前期の海産性の著名な貝塚である。なお、骨沢貝塚・笹貝沢貝塚については、いずれも縄文時代の貝塚であるが、骨沢の骨は貝塚において良好に保存された獣骨、笹貝沢は貝塚の貝類に由来した地名とも考えられるが断定することはできない。

貝を冠する地名を左に紹介しておくが、貝塚との相関関係が不明であり、遺跡地名とすることはできない。

貝坂（弘前市大字平山）

貝沢（弘前市）

貝鞍（八戸市大字石堂）

貝釜（岩崎村大字岩崎）

貝羅木（大鰐町大字唐牛）

貝ノ口（七戸町）

貝屋敷（新郷村大字西越）

貝ノ口（七戸町）
貝屋敷（新郷村大字西越）
ところで、わが国では奈良時代の『常陸国風土記』⁽¹⁹⁾以後、貝塚遺跡が手長足長・ダイダラボウシ等の巨人伝説と結びついている例が多い。本県の貝塚遺跡に巨人伝説が伴う明確な例はないが、八戸市類家二丁目にある縄文時代早期の帽子（ポッチ）屋敷貝塚、小泊村字坊主沢の坊主沢遺跡（平安時代の土師器を出土）、六ヶ所村大字平沼字二階坂の坊主沢遺跡（縄文時代早期～後期の土器出土）等は音声的にダイダラボウシ（ポッチとも）と類似しているところがあり、全く無関係なのであろうか。県内にも手長足長伝説が残っており、中谷が前掲書⁽¹⁾で紹介している。一つは、中道等の『奥隅奇譚』⁽¹⁶⁾に記されている白神獄（岳）の手長足長、一つは市浦村相内村（現大字相内）の手長足長であるが、いずれも貝塚遺跡等と結びついたものではない。

(5) 洞穴・岩陰内から遺物が出土するいわゆる洞穴遺跡が、県内に一六ヶ所確認されている。洞穴には未調査のため、未だ遺物の出土をみず、洞穴遺跡と確認されていない洞穴も多い。この洞穴遺跡に由来すると思われる遺跡名も県内にいくつかみられる。

石家戸洞穴（青森市）

大穴洞穴（六ヶ所村大字泊字村ノ内）

岩谷沢岩陰（川内町大字川内）

岩屋洞穴群（東通村大字岩屋）

石家戸洞穴内からは縄文時代の土器片が出土しており、⁽²¹⁾大穴洞穴から

は縄文時代以降の遺物や古代の人骨が出土している。また、岩谷沢岩陰からは縄文時代後・晩期の土器片が出土し、岩屋洞穴群（三基あり）からはアイヌ人骨等が出土している。いずれも洞穴（窟）を表現する石家戸・大穴・岩屋（岩谷も岩屋の可能性あり）の呼称が付されている。

なお、岩屋洞穴群は現在、小字名によって往来洞穴と呼称されている。県内には洞穴（未発掘のため遺跡と確認されていないが）に由来すると思われる地名が多く、左に例示する。

大穴（黒石市大字二庄内）

石倉（黒石市大字花巻・大字温湯）

石倉（十和田市大字米田）

鬼泊岩屋観音（今別町大字綱不知）

岩屋堂（相馬村大字沢田）

岩屋観音（西目屋村大字田代）

石家戸（碓ヶ関村）

石ヶ戸（十和田湖町大字奥瀬）

石倉沢（川内町大字川内）

石倉（東通村大字尻屋・大字岩屋）

このなかで、大穴・鬼泊岩屋観音・岩屋堂・岩屋観音・石家戸・石ヶ戸はいずれも洞穴であり、内部に観音堂等をまつる例が多い。北八甲田にある石倉岳（標高一、二〇二メートル）は、おそらく、洞穴がある（多い）山岳なのであろう。

(6) 県内各地には平安時代のものと考えられている竪穴住居跡が未だ

に埋り切らず、浅いくぼみとなって残されている事例が多い。竪穴住居跡は一〜二軒と少ないものから数十軒まとまって分布するものまで種々あるが、いわゆる館と言われる空堀をもつ遺構内に分布する事例も多い。この竪穴住居跡に由来すると思われる遺跡名はきわめて少なく、現在のところ左の一ヶ所のみである。

砂子田百穴⁽²²⁾（七戸町字大林）

現在、大林遺跡・砂子田館と呼称されているが、竪穴住居跡群のくぼみ、館跡の空堀等は削平されたり、埋められたりしており、確認することができないが、多数の竪穴住居跡のくぼみを百穴と表現したものであろう。

(7) われわれが古代以降の遺跡を踏査する際、鉄滓片が多数散布しているのに出会うことが多い。鉄滓は一般にカナクソ（金糞）と言われ、製鉄・鍛冶の際にできるものであるが、この鉄滓とか野鍛冶場（タタラ）に関連して付されたとみられる地名・遺跡名が県内に分布している。

金山遺跡（五所川原市大字金山）

金糞平（三沢市大字三沢）

金谷沢(2)遺跡（むつ市大字奥内字金谷沢）

鑪鑪（たたら）（平内町大字東滝一白砂間）

鉄沢遺跡（鱒ヶ沢町松代国有林）

金屋（尾上町大字金屋）

銅屋遺跡（東通村大字白糠字銅屋）

これらのうち、金山遺跡からは平安時代の土師器が出土し、通称金糞平では明治期の開拓の際にはしばしば鉄滓が出土したと言われ、同地区内の

庭構遺跡⁽²³⁾の発掘調査で平安時代の羽口（ふいご口）・鉄滓等が出土している。また、金谷沢(2)遺跡では平安時代の堅穴住居跡や土師器が発見されており、鑪輔付近の安井崎灯台付近では道路工事中に多量の鉄塊が出土したと⁽²⁴⁾言う。鉄沢遺跡では発掘調査によって多数の鉄滓が発見されており、金屋地区の永泉寺跡からは平安時代の土師器・須恵器が出土している。

金山遺跡からは鉄滓等は出土していないが、金山製鉄場のあった可能性がある。また、金谷沢(2)遺跡・金屋地区でも明確には鉄滓が報告されていないが、金屋地区の周辺には鉄滓・羽口等が多数発見されているので、未発見かも知れない。ちなみに金屋は、たたら師の守護神⁽²⁵⁾金屋子（かねこ）神を意味するという。また、銅屋遺跡からは古代の土師器が出土している。

関連する地名は県内各地にあり、一部を例示する。

金浜（八戸市）

金谷沢（八戸市大字是川）

金屎（八戸市大字鯨町）

金堀沢（平内町大字内童子）

タダラノ沢（天間林村）

金堀沢遺跡（六ヶ所村大字倉内）

金矢（六戸町大字大落瀬）

金糞沢（南部町）

これらのなかで、金浜は砂鉄等の産出地、金堀沢は砂金を採った沢である可能性もある。また、前述した以外にも、県内には七戸町の鍛冶林、

五戸町の鍛冶屋敷等の鍛冶を冠する地名があり、古代以降の鍛冶遺構と何らかの関連が考えられるが、遺跡との関連については、未だ把握されていないようであり断定はできない。

(8) 原始・古代以降近年にいたるまで、わが国では墓・供養塚その他何らかの目印として円墳状の盛土をもった遺構が築かれており、これに由来すると思われる地名・遺跡名がある。十三森・九十九森、および塚を付するもの等である。

まず、十三森について述べる。

十三森（黒石市大字黒石字十三森）

十三盛遺跡（五所川原市大字長橋字広野）

十三社平遺跡（七戸町字寒水）

十三社遺跡（上北町大字新館字八幡）

十三森遺跡（下田町字神明前）

これらの遺跡からはいずれも古代の遺物が発見されており、十三森からはかつて土器が発見されたといわれ、十三盛遺跡および十三社平遺跡からは古代の土師器が出土している。また、十三社遺跡および十三森遺跡には円墳状の盛土群が現在でも残されており、十三社遺跡からはかつて燧手刀や中世陶器が発見されたと言われ、十三森遺跡からは土師器・鉄滓が発見されている。

十三森の地名は青森市大字油川にもあるが、遺構・遺物は不明である。しかしながら、いずれも何らかの円形の盛土群に伴って発生した地名であると思われる。これらの盛土には墳墓も含まれようが、中世、村境や

峠に供養塚として築かれたとされるいわゆる十三塚も含まれている可能性もある。

つぎに、九十九森について述べるが、この地名は津軽地方にみられる。

九十九盛（青森市大字高田字川瀬）

九十九森（鯉ヶ沢町中村川流域）

九十九森（岩木町大字八幡字長沢）

九十九森遺跡（大鰐町大字長峰字九十九森）

これらはいずれも多数の円墳状の盛土群をもつ遺跡であって、九十九盛ではほかに堀もあったとされ、鯉ヶ沢町のもは自然のものか人工のものか不明であるが一〇〇基前後あったとされている。⁽²⁶⁾また、大鰐町のものには現在でも多数の盛土群があり、遺跡内から土師器が発見されている。岩木町のもは唯一の発掘調査された事例であるが、一〇四基の盛土群と館の空堀および堅穴住居跡が確認されており、盛土から人骨と一〇世紀末～一五世紀の中国銭が出土しており、調査担当者は一五世紀末～一六世紀半中葉頃の構築年代を推定している。⁽²⁷⁾なお、この遺跡は現在、一般的には荒神山遺跡と呼称されている。

つぎに、盛土を伴う遺構として丑盛を紹介しておく。

丑盛（尾上町大字猿賀字明堂）

この円墳状の遺構は一基のみであり、隣りに牛石とされる巨石があることから、牛盛と江戸時代に呼称されていたものである。発掘調査結果によれば、その年代は大雑把に一～一七世紀で、性格は不明とのことである。なお、当遺跡は現在、五輪野遺跡と呼称されている。⁽²⁸⁾

つぎに、塚を付す地名について述べる。

塚は円墳状の盛土や墓を意味する言葉であるが、これにちなんだ遺跡名もある。

塚ノ越古塚（南部町大字沖田面字塚ノ越）

この遺跡は南部氏一族の墓と言われ、現在、二基のみ盛土が残っている。このほか、墓ではないが前述の貝塚（天間林村）および米糠が出土したとされる糠塚⁽¹¹⁾（八戸市大字糠塚）も貝殻や米糠が堆積し、盛りあがっている状況に由来するのであろう。塚を付す地名は県内各地に多数残されている。篠塚（青森市）、恋塚（弘前市）、大塚・京塚・行人塚・長塚（八戸市）、境塚・根木塚（十和田市）、横塚（深浦町）、塚越（尾上町他）、塚森山（浪岡町）、糠塚森（大鰐町）、坊ノ塚（野辺地町）、板子塚（川内町）、金蔵塚・三方塚・十海塚（五戸町）、丁塚（三戸町）、石塚・御坊塚（名川町）、塚森（福地村）、築塚・治仏塚（南郷村）、蛇塚（新郷村）等であるが、これらの地名と遺跡としての塚との相関関係、さらにまた仮りに塚があったとしても、その構築年代等が未調査のため不明な点が多い。現在に残されている一里塚（八戸市・天間林村・南郷村等）、藩境塚（平内町・野辺地町）、太素塚・法心（ほっしん）塚（十和田市）、千鳥塚（深浦町）、千人塚（三戸町）等の墓地・供養塚は殆ど近世に築かれたものであるので、遺構としての塚は近世に属するものが多いと考えられる。

(9) 原始・古代の遺跡あるいは中・近世の城館跡に対し、かつて富者・富豪（長者）の住んでいた屋敷跡等と考えられた（長者伝説）ため、長者が冠されている地名がある。長者地名（遺跡名）が「朝日の長者」か

「夕日の長者」かのいずれの伝説を伴うものか未調査であるため不明であるが、県内各地にみられる。

長者森（弘前市大字石川）

長者山（八戸市大字糠塚）

長者森遺跡（八戸市大字田面木字長者森）

市川長者久保(1)？(3)遺跡（八戸市大字市川町字長者久保）

長者森山遺跡（五所川原市大字松野木字花笠）

長者森館（相馬村大字紙漉沢）

長者森遺跡（大鰐町大字唐牛字姫ヶ沢）

長者森館（浪岡町大字王余魚沢）

長者屋敷跡（浪岡町大字高屋敷）

長者久保(1)遺跡（東北町字長者久保）

長者屋敷（三戸町大字斗内）

これらの長者地名（遺跡名）と石器時代の遺跡の關係に論及したのは中谷の前掲書であるが、前述の地名について考えてみると、三戸町の長者屋敷を除いて、いずれもなんらかの遺跡となっている。弘前市の長者森にも縄文時代の遺跡があり、付近に館跡もあると言う。また、八戸市の長者山は糠塚にあり、かつて米糠を出土したこと⁽¹¹⁾に由来するという伝説がある。八戸市の長者森・市川長者久保(1)？(3)遺跡、東北町の長者久保(1)遺跡からは縄文時代の土器・石器や鉄滓等が出土している。五所川原市の長者森山遺跡は平安時代の須恵器・土師器を出土するが、長者森山館でもある。相馬村・浪岡町の長者森館は中世の城館跡と考えられているが、浪岡町のものについては位置が王余魚沢館かどうか疑問が残る。

また、浪岡町の長者屋敷跡はかつて遺物が出土したという。

以上のように、本県の長者関連の地名はほほいずれかの遺跡と重複するように思われるのであって、相互の密接な關係が考えられる。

(10) 原始・古代以降の遺跡に対して、かつて蝦夷・アイヌが住んでいたという伝承に由来して付されたと思われる地名・遺跡名であり、県下一円にみられる。

蝦夷森（青森市大字戸崎）

蝦夷木館⁽¹⁵⁾（青森市大字諏訪沢）

蝦夷館（八戸市大字河原木字蝦夷館）

蝦夷館（岩木町大字新法師）

蝦夷館（相馬村大字湯口字一ノ下り山）

メノコ館（相馬村大字藤沢字野田）

狄ヶ館（森田村大字大館）

蝦夷館⁽¹⁵⁾（大鰐町？）

蝦夷塚⁽¹⁵⁾（浪岡町）

エゾ館（平賀町大字館山字下扇田）

夷中館⁽¹⁵⁾（平賀町）

蝦夷岩（野辺地町字有戸）

エゾ館（六戸町、高館のこと）

エゾ館（上北町大字大浦字二津屋）

蝦夷館（大畑町大字大畑字涌館）

蝦夷穴（東通村大字岩屋字往来）

蝦夷館（東通村大字猿ヶ森字大沼平）

蝦夷館（田子町大字相米字蝦夷館）

蝦夷館（南部町大字大向字下比良）

蝦夷館（階上町大字道仏）

夷館（階上町大字平内）

狄館（福地村大字杉沢字館）

蝦館（新郷村大字西越字蝦館）

これらはおもにかつて蝦夷が住んでいると思われていた館跡等の遺跡であるが、青森市の蝦夷森は戸崎館、岩木町の蝦夷館は高館城、相馬村の蝦夷館は湯口茶臼館、メノコ館は藤沢館、野辺地町の蝦夷砦は明前館、上北町のエゾ館は二津屋館、大畑町の蝦夷館は涌館、蝦夷穴は前述した岩屋洞穴群、階上町の蝦夷館は道仏館、夷館は平内館、福地村の狄館は杉沢館とも呼称されている。また、青森市の蝦夷木館、八戸市・大鰐町？の蝦夷館、浪岡町の蝦夷塚はその明確な所在地については不明な点が多い。平賀町の夷中館も同様である。

なお、蝦夷穴（岩屋洞穴群）からは実際にアイヌ人骨が出土している⁽²⁹⁾が、アイヌ人が居住していたために付された呼称であろうか。

県内にはこのほかにもえぞを冠する館跡・地名等が分布しており、左に例示する。

前田蝦夷館（青森市大字前田）

高田蝦夷館（青森市大字高田）

藤沢蝦夷館（平内町大字藤沢）

内蛭沢蝦夷館（東北町字内蛭沢向）

内沼蝦夷館（六ヶ所村大字倉内字芋ヶ崎）

中志蝦夷館（六ヶ所村大字倉内字家ノ上）

狄森（八戸市大字是川）

狄花（七戸町）

夷ヶ沢平（横浜町）

夷ヶ沢川（横浜町）

蝦夷鼻（上北町大字新館）

えぞやしき⁽³⁰⁾（六ヶ所村大字泊）

蝦夷森（名川町大字平）

上狄川・下狄川（大畑町）

これらのなかで、前田蝦夷館と内沼蝦夷館については、蝦夷館の伝承等に由来するものも含まれるのかも知れないが、丘陵の先端に一〇三条の空堀を配した北海道のチャシ（砦・館跡）に類するいわゆる「蝦夷館型」の型式分類名称が付されている可能性も否定できない。これは、前述の単に蝦夷館と称する館跡にもあてはまる可能性もある。

また、八戸市の狄森地内には縄文時代後・晩期と歴史時代の遺物出土する風張遺跡があるので、この遺跡に由来する可能性もある。

ほかのえぞを冠する地名も何らかの伝承に由来した地名と思われるが、いずれの遺構に伴うものか不明である。

なお、中谷は前掲書⁽¹⁾において森田村狄ヶ館のほかに鱒ヶ沢町の太平エゾ館を紹介しているが、位置は不明である。

蝦夷のほかに明確にアイヌ（ノ）を冠する遺跡名もある。

アイノ沢遺跡（十和田市大字洞内字芦沢）

アイヌ野遺跡（東通村大字小田野沢字南通）

アイノ沢は縄文時代の遺跡であり、アイヌ野は別にアイヌ森とも呼称されるが、かつて竪穴住居跡群があったとされ、土師器が出土している。⁽³¹⁾

中谷は前掲書で本県の石器時代の遺跡として前述のアイノ沢、東北町の蝦沢アイノ館（前述した内蛭沢蝦夷館）、のほかに船ヶ沢アイヌ館、板ノ沢アイノ館を紹介しているが、市町村等が不明であり、位置が特定できない。

また、鯨ヶ沢町大字日照田町字野脇山ノ上に土人長根遺跡がある。洞穴があり、付近から鉄滓等が発見されているという。この土人を特定の人種には結びつけられないが、蝦夷の可能性は充分ある。

(11) おもに中世に築かれたと考えられる豪族の居館・居城¹¹いわゆる城館跡に由来すると思われる地名で、県内各地に多数分布しているが、このなかには館を付す地名をもったり、あるいはタテ・シロ等と称される城館跡、屋敷等を付す遺跡・地名、また、城館跡の堀に由来する地名、さらには城館跡の形態に由来する地名等がある。

まず最初に館・城を付す地名をもったり、通称タテ・シロ等と称されている館城跡について紹介する。

油川城（青森市―タテ）

築木館（青森市 大字築木館―タテの畑）

小館（青森市 大字小館―タテ・シロッコ・ホリッコ）

駒込館（青森市―シロッコ・ホリッコ）

新城（青森市 大字新城）

番館（弘前市大字番館―館城）

笹館（弘前市大字笹館）

中別所館（弘前市大字宮館）

宮館（弘前市大字宮館字宮館沢）

福村城（弘前市大字福村字新館添）

根城（八戸市大字根城）

新井田古館（八戸市大字新井田字古館）

櫛引城（八戸市大字櫛引字館神）

新田城（八戸市大字新井田字館平・外館・館下）

小館（八戸市大字河原木字小館）

古館（八戸市大字新井田字古館）

大茂館（八戸市大字妙字大茂館―松館）

櫛館（八戸市大字是川字櫛館）

風張館（八戸市大字是川字館ノ内）

高館（黒石市大字高館）

築館（黒石市大字上山形字築館）

石名坂館（黒石市大字石名坂字館）

中野不動館（黒石市大字南中野字不動館）

飯詰城（五所川原市―高館城）

原子城（五所川原市―オタテ・タテの沢）

小田館（十和田市大字洞内字館ノ下）

上館（十和田市大字切田字上館）

城ヶ沢館（むつ市大字城ヶ沢―八角館）

小館 (平内町大字東田沢字小館)
福館 (平内町大字福館字福館)
沼館 (平内町大字沼館)
観瀾山館 (蟹田町一館の鼻)
館前館 (鱒ヶ沢町大字館前町)
川崎城 (鱒ヶ沢町大字館前町)
無戸館 (鱒ヶ沢町一旧村名館村)
亀ヶ岡城 (木造町大字館岡)
三ツ館 (木造町大字三ツ館)
元城 (深浦町大字深浦字元城)
玉川館 (岩崎村大字黒崎字館の上)
垣上館 (岩崎村一館の上・笹森館)
大館 (森田村大字大館)
狄ヶ館 (森田村大字大館)
枉子館 (車力村一タテ)
田代館 (西目屋村一タテッコ)
羽黒館 (大鱒町字大鱒字羽黒館)
古館 (大鱒町大字蔵館字古館)
唐牛城 (大鱒町大字唐牛字館ノ上)
大釈迦館 (浪岡町一タテの畑)
本郷館 (浪岡町一タテ)
新屋城 (平賀町大字新屋字栄館)
新館城 (平賀町大字新館)

沖館城 (平賀町大字沖館)
杉館 (平賀町大字杉館)
エゾ館 (平賀町大字館山)
小館 (平賀町大字松館)
松館 (平賀町大字松館)
館山館 (平賀町大字館山)
館田館 (平賀町大字館田)
唐竹古館 (平賀町古館)
水木館 (常盤村大字水木字古館)
田舎館城 (田舎館村一新館、古堀あり)
古館 (碓ヶ関村大字古懸字沢田館岸)
滝井館 (板柳町大字館野越一古館)
嘉瀬館 (金木町一タテッコ)
尾別館⁽¹⁰⁾ (中里町一古館)
胡桃館 (鶴田町大字胡桃館)
古館 (市浦村大字磯松字古館一フンダテ)
館野館 (七戸町字館野)
荒熊内館 (七戸町一シロヤマ)
館越館 (百石町)
沢田館 (十和田湖町大字沢田字館一タテ)
高館 (六戸町大字犬落瀬字高館)
赤平館 (上北町大字新館)
戸館 (上北町大字新館)

館越館（上北町―白旗館）
 白旗館（東北町―タテ）
 下田館（下田町字館越）
 天間館（天間林村大字天間館）
 大館・小館（天間林村大字天間館）
 安倍館（六ヶ所村―倉内のタテ）
 奥戸館（大間町大字奥戸字館ノ上）
 涌館（大畑町大字大畑字涌館）
 将木館（東通村大字田屋字将木館）
 大館（東通村大字田屋字大館）
 川守田館（三戸町大字川守田字館）
 三戸城（三戸町大字梅内字城ノ下―シロヤマ）
 斗内館（三戸町大字斗内字館）
 五戸館（五戸町字館）
 古館（五戸町字古館―兔内館・新井田館）
 フン館（五戸町―古館）
 石亀館（田子町大字石亀字館）
 茂市館（田子町大字茂市字桜館）
 種子館（田子町―古館）
 下名久井館・古館（名川町大字下名久井字館）
 赤石館（南部町大字赤石字館）
 平良ヶ崎城（南部町大字沖田面字南古城）
 晴山沢館（階上町大字晴山沢字中城）

杉沢館（福地村大字杉沢字館）
 福田館（福地村大字福田字館）
 古館（福地村大字福田字古館）
 高橋館（福地村大字高橋字横館）
 又重城（倉石村大字又重字館町）
 中市館（倉石村―タデッピラ）
 戸来館（新郷村大字戸来字館神―タテ）
 西越館（新郷村大字西越字下田館）
 これらはいずれも城館跡に関連すると思われる地名・通称であるが、館ノ沢（青森市・蟹田町など）、タテ沼（東通村）等の自然地名も同様であろう。城館跡に由来すると思われる地名は精査すれば、まだまだ増加すると思われる。

なお、城館跡内に現在建てられている民家の苗字や屋号にもタテがあり、各民家の呼称となっている例もある（十和田市伝法寺館、車力村証字館、六ヶ所村安倍館、南郷村頃巻沢館など）。

また、若干話はずれるが、城館跡内には館神として「八幡宮」がまつられている例が多く、これとの関連で遺跡地名が付される例もある。

つぎに、前述の城館跡あるいはそれ以前の年代の遺跡等に対し、かつてなんらかの屋敷があったと考えられたためか、屋敷が付される地名・遺跡名があり、県内各地にみられる。

古屋敷館（弘前市大字国吉字村元）

帽子屋敷貝塚（八戸市類家二丁目）
 千石屋敷遺跡（八戸市大字八幡）
 中屋敷遺跡（十和田市大字切田字中屋敷）
 下屋敷遺跡（十和田市大字米田字下屋敷？）
 土台屋敷遺跡（鱈ヶ沢町大字姥袋町字滝の下）
 坊屋敷遺跡（大鰐町大字苦木字野尻）
 長者屋敷跡（浪岡町大字高屋敷）
 寺屋敷館（浪岡町）
 坊主屋敷（平賀町大字館山）
 古屋敷館（平賀町大字原田字稲元）
 熊屋敷遺跡（平賀町大字広船字山下）
 寺屋敷館（平賀町大字尾崎字木戸口）
 誉田屋敷館（平賀町大字切明字誉田邸）
 安部太郎屋敷館（中里町大字今泉）
 古屋敷遺跡（七戸町字古屋敷）
 古屋敷貝塚（上北町大字大浦字大沢）
 屋敷添遺跡（戸館）（上北町大字新館字屋敷添）
 寺屋敷館（横浜町字家ノ前川目）
 上屋敷遺跡（三戸町大字袴田字上屋敷）
 高屋敷遺跡（五戸町大字扇田字高屋敷）
 工藤屋敷館（五戸町）
 高屋敷遺跡（名川町大字高屋敷）
 佐藤館（南部町大字高屋敷）

相内館（南部町大字相内字荒屋敷）
 中屋敷遺跡（階上町大字晴山沢字中屋敷）
 中市城（倉石村大字中市字高屋敷）

これらのなかで、帽子屋敷・長者屋敷跡については前述したが、千石屋敷、十和田市中屋敷・下屋敷、土台屋敷、坊屋敷、古屋敷貝塚、高屋敷（二遺跡）、階上町中屋敷の諸遺跡からは縄文時代の土器・石器あるいは平安時代の土師器等が出土しており、熊屋敷、七戸町古屋敷、上屋敷遺跡からは平安時代の土師器が出土している。また、坊主屋敷からは多数の古銭が出土している。その他の館を付すのは、中世とされる城館跡であって、この時代のものが時期的に最も多い。屋敷と城館とは多分に同一視されるところがあり、さらに館跡の一類型として「屋敷型」があり、屋敷地名と城館跡との相関関係は充分考えられる。それ以前の年代の遺跡との関連については、たとえば、縄文土器等の出土によって、かつて当地に豪族の屋敷跡があったと考えられた可能性はないものであろうか。

県内には、その他各地に屋敷を付す地名が多いが省略する。

つぎに、堀に由来する地名・遺跡名について述べる。

堀子山⁽²⁾（青森市）
 堀越城（弘前市大字堀越）
 堀端（弘前市大字町田字山吹）
 大堀平館（相馬村大字紙漕沢）
 唐竹城（平賀町大字唐竹字堀合）

堀切（浪岡町大字吉内）

溝城（水木城）（常盤村大字水木）

古堀（田舎館村大字田舎館字中辻）

堀切川（百石町）

大堀平（十和田湖町大字奥瀬字大堀平）

深堀平（十和田湖町大字沢田字深堀平）

堀割遺跡（六戸町大字折茂）

大溝平（南部町大字小向字大溝平）

このなかで、堀子山は駒込館のことであろう。また、弘前市の堀端は町田館に由来するものであろう。浪岡町の堀切は吉内館に由来するものであろうか。古堀は田舎館城に由来する。百石町の堀切川は館越館、十和田湖町の大堀平は奥瀬館、同深堀平は沢田館に由来するものであろうか。南部町の大溝平は正（聖）寿寺館に由来するものである。

城館跡の堀と堀地名等との相関関係が推定される例はほかにまだ多数あると思われるものである。

なお、堀跡は人名等とも関連があり、名川町大字森越の森腰館の堀跡には堀内姓の民家があったり、南郷村大字頃巻沢の頃巻沢館の堀跡には屋号がホリの民家等もある。

つぎに、館の形態に由来する遺跡名について述べる。

乳井茶臼館（弘前市大字乳井）

湯口茶臼館（相馬村大字湯口字一ノ下り山）

大鱈茶臼館（大鱈町大字大鱈字茶臼館）

高館鉢巻山遺跡（黒石市大字赤坂字北野崎）

鉢巻館（鱈ヶ沢町大字南浮田町字米山）

鉢巻山館（大鱈町大字森山）

このなかで、茶臼館については、館跡の形態が茶臼に類似することに由来するものであろう。

また、鉢巻を冠する館跡は、館を囲む空堀があたかも人間が頭に鉢巻をしめている情景に類似することに由来するものであろう。黒石市の鉢巻山遺跡は館跡とも言われており、土師器・須恵器も出土している。

最後に「チュウシ」が付された地名であるが、言語学者⁽³²⁾によつて茶臼とともにアイヌ語で砦・館・柵・柵囲いを意味するチャシ⁽³³⁾が変化したものと解される場合がある。もし関連するのであれば、五所川原市大字松野木字中子には長者森山館か観音林館、蟹田町大字中師（かつて中深）には観欄山館、かつて中志沼と言われた、六ヶ所村の内沼の湖岸（大字倉内）の中志には中志蝦夷館が関連するのであろうか。

三 北海道・東北地方の若干の事例⁽³⁴⁾

つぎに、北海道・東北地方の遺跡地名について、簡単に紹介する。

(1)の土器等に由来する事例は中谷の前掲書⁽¹⁾によれば、東北と九州地方に分布するが、筆者が気づいたものでは、宮城県大衡村大字大衡字亀岡に古代の土師器・須恵器を出土する亀岡遺跡、同鳴瀬町大字野蒜字亀岡に縄文時代晩期の亀岡貝塚と古墳と平安時代の亀岡遺跡がある。(2)の石器

に由来する事例は中谷によれば、愛知・岐阜県以北へ東北地方北部に分布しているが、それ以外に筆者が気づいたものでは、宮城県古川市大字敷玉字矢根八幡の矢根八幡遺跡（縄文時代晩期）、山形県天童市大字矢野目の矢口遺跡（縄文時代晩期）等も可能性がある。また、天狗を冠する遺跡も山形県櫛引町や遊佐町に縄文時代の天狗森遺跡がある。(3)の立石等に由来する事例も中谷によれば、東北へ九州地方に分布する。昭和五二・五三年に発掘調査が行われた岩手県大迫町内川目の立石遺跡では、立石を伴うとされる縄文時代後期の配石遺構が検出されている。(4)の貝塚に由来する事例は中谷によれば、東北へ九州地方に広く分布するが、筆者の気づいた例では、宮城県河北町皿貝の皿貝貝塚（縄文時代後期）、若柳町大字下畑岡字峯貝殻の貝殻貝塚（縄文時代）、涌谷町大字小塚字貝坂の貝坂貝塚（縄文時代前期）、松島町の貝殻貝塚（縄文時代前期）等もある。

また、北海道釧路市の貝塚町は比較的近年成立した地名であり、縄文時代早期の大遺跡東釧路貝塚に由来するものである。(5)の洞穴・岩陰に由来する地名・遺跡名については全国的に分布するものであろう。筆者の気づいた東北・北海道の例では、北海道歌登町大字本幌別字岩屋沢には岩屋沢洞穴遺跡がある。また、秋田県雄勝町大字上院内字岩井堂には縄文時代の著名な岩井堂岩陰遺跡群があり、岩手県岩泉町には大穴洞穴・赤穴洞穴等の遺跡がある。(6)の堅穴住居跡に由来する遺跡地名は他の例を寡聞にして知らないが、百穴は横穴古墳（埼玉県吉見百穴）に使用される例がある。(7)の製鉄・鍛冶に由来すると思われる地名・遺跡名もほぼ全国的なものと思われるが、類例は宮城県仙台市大字高田字カナクソ

のカナクソ遺跡（中・近世の製鉄跡？）、仙台市大字富沢字鍛冶屋敷の奈良・平安時代の鍛冶屋敷遺跡・岩沼市大字志賀字銅谷の銅谷A遺跡（古代の羽口・鉄滓出土）・柴田町の鍛冶内遺跡（平安期の土師器・鉄滓出土）・三本木町の金堀沢遺跡（窯跡、鉄滓出土）、新潟県六日町大字余川字金屋道上の金屋遺跡（平安時代主体、砥石・鉄器等出土）等がある。(8)の盛土を伴う墓・塚等に由来すると思われる地名・遺跡名も全国的に分布するとみられる。本県の十三森に関連するとみられるものは、秋田県雄物川町大字東里字十三塚、岩手県花巻市、宮城県松島町大字桜渡字壇山十三塚・富谷町殻田等に十三塚遺跡があり、松島町のは室町時代、富谷町のは近世の構築年代という。

本県には古墳時代の古墳が分布していないが、岩手県以南には種々の形態の古墳が分布している。これらの古墳には、角塚古墳（岩手県水沢市）、大塚山古墳（福島県会津若松市）、経ノ塚古墳（宮城県名取市）等塚を付する遺跡地名が多い。(9)の長者を冠する遺跡も多数あり、中谷によれば、東北へ九州地方と全国的に分布する。筆者が確認したものでは、秋田市、山形県鮭川村の長者屋敷遺跡、宮城県大衡村の長者遺跡・女川町の長者浜遺跡・河南町の長者平遺跡（長者館）、歌津町の長者屋敷貝塚・南方町の長者原貝塚がある。また、秋田県男鹿市の長者森遺跡がある。さらに、宮城県古川市・瀬峰町・築館町・栗駒町、山形県飯豊町・東根市・長井市・舟形町等の長者原遺跡がある。いずれも、縄文時代へ古代の遺物を出土する遺跡である。(10)の蝦夷を冠する遺跡名であるが、中谷によれば、新潟県・青森県に分布する。この名称は、終末期の古墳（円墳）や中世とされる城館跡に付される場合が多い。中谷の指摘した

以外にも北海道福島町の蝦夷館山、秋田県雄物川町大字造山字蝦夷塚の蝦ヶ塚古墳群、岩手県盛岡市大字上太田字狄森の太田蝦夷森古墳群・矢巾町の狄森古墳群等がある。(11)の中世とみられる城館跡に由来する地名は日本全国に分布しているので省略し、北海道のみを紹介する。いわゆる道南一二館とされるもので、厚沢部町字城丘の館城跡、戸井町字館町の戸井館、福島町字館崎の隠内館である。

つぎに、屋敷を付す遺跡名であるが、おそらく全国的な地名であろう。

秋田市大字土崎字中屋敷の寺屋敷(縄文時代)、仙北町の殿屋敷(縄文時代晩期)、岩手県久慈市の山屋敷(縄文・奈良・平安時代)・軽米町の吠屋敷(縄文時代)・滝沢村の高屋敷(縄文・平安時代)・矢巾町の久保屋敷(中世)・紫波町の古屋敷(平安時代)・石鳥谷町の安堵屋敷(縄文時代晩期)・江刺市の中屋敷(平安時代)・江釣子村の蔵屋敷(弥生時代)、宮城県蔵主町の二屋敷(縄文時代)等の遺跡がある。

つぎにチャンについて述べる。

北海道に分布するチャンには館と同様、地名・形状等の遺跡地名がみられる。

標津町字茶志骨のタブ山・オンネ・浜茶志骨等のチャン、厚岸町字お供の松葉裏山・逆水松(さかさおんこ)・奔渡(ぼんと)裏山・鹿落し等のチャン、厚岸町の古城ヶ岡チャン、釧路市城山町のモシリヤチャン、伊達市の館山チャン、泊村大字堀株(ほりかつぶ)字茶津の茶津チャン等である。このほかに、名寄市の智恵文チャンの傍らをチャンコッナイが流れ、美唄市には茶志内がある。また、標津町字茶志骨には茶志骨川が流れる。いずれも、チャンに由来する地名である。厚岸町字お供の

お供は、チャンが重ね餅状のお供え餅にみえるために付された地名である。

なお、青森県にある、茶臼の付された遺跡名は全国的にみられるが、茶臼山古墳等、古墳の形状に由来して古墳に付される場合も多い。

四、まとめ

以上、県内の遺跡地名を中心にして述べてきたわけであるが、遺跡に由来すると考えられる地名が意外に多数残されていることに気づかれたことと思う。しかしながら、中世以前の遺物・遺構に限定したとしてもなお、各遺跡の精査、県内の地名・通称等の調査あるいは古文献の調査の進展によって、遺跡地名の数はさらに増加するはずである。

つぎに、これらの遺跡地名の由来・成立年代等についてふれてみたい。

各遺跡地名成立の由来は、推測によるしかないが、前章で述べた小泊村縄文沼遺跡名の成立の経緯が一つの様相を示していると考えられる。

すなわち、従来、地名がなかった(別な地名があったか?)沼の岸に縄文時代の遺跡が発見されたため、沼が縄文沼と呼称され、文献に記載されて、遺跡名が縄文沼遺跡となったという経緯である。これは、亀ヶ岡遺跡や石器関係地名・貝塚地名も同様であろう。とくに、説明できない不可思議な事象(たとえば、地中から土器や石器・鉄滓等が出土する、海から離れているのに貝がある等)があれば、各事件がますます土地に強く印象づけられるはずである。そして何らかの伝承を誘発し、当該地域の地名成立につながっていくものと解される。また、常々

奥暗い洞穴、未だ埋り切らぬ堅穴住居跡群、あるいは立石等も当初はそれ自体に名称が付されたはずであるが、やがて何らかの伝承・説話を伴い、付近一帯を代表する目印となり、一帯の地名となっていたと解される。

比較的構築年代が新しい館跡・屋敷跡については、豪族の居館・長者の住んでいた屋敷跡というように当時の民衆の憧れの気持ちも手伝って伝承・伝説が生れ、単に、遺構そのもの呼称から一帯を代表する呼称となっていたと解することができる。

以上、遺跡と関連づけて地名の由来を解釈したわけであるが、あるいは豪族の姓名が地名化したものもあるかもしれないし、当初の地名と異なる音声に変化した結果、当て字が行われたものなどもあるかもしれない。さらにまた、地名の合併・交替等、さまざまな考え方ができることは承知している。

つぎに、遺跡地名と思われる各地名の成立年代等について述べる。

各地名が一体いつ頃成立したのかという点は、明確に記録として残されたものが殆どないという現状においては、まず不可能と言って良い。したがって、ここでは大雑把な推測のみにとどめておきたい。

まず、縄文時代の土器・石器等を出土する遺跡、貝塚等についての地名成立は、当然ながら縄文時代以降のことであるが、文献上は江戸時代初期にまで遡ることができる。前述した亀ヶ岡遺跡は、『永禄日記』（館野越本）の元和九年（一六三三）にその由来が記されており、甕が多く出るので、当地を亀ヶ岡と呼ぶべき旨記されている。当記載が間違はなく元和九年に記されたものとするれば、亀ヶ岡の地名は一七世紀初期

にまで遡ることができよう。また、亀岡については、現藤崎町の亀岡が『神社微細社司由緒調書上帳』の寛文元年（一六六一）の記事としてみえているので、一部の亀岡地名は既に近世初期には成立していたものと解される。

また、亀山については、中世、山之辺郡の郷村名にあり、既に一四世紀に成立していた地名と考えられる。

カモコ山の遺跡地名は、遺跡自体が一般的に知られるのは明治時代に入ってからのことであるため、その成立は明治時代かはやくとも近世末期を遡りえないものであろう。

なお、筒木坂については、近世初期には木筒木村であったのが、改称されたものとする見解も示されている。⁽¹⁰⁾

つぎに、石器等に関すると思われる遺跡地名であるが、矢田村（現青森市）は貞享四年（一六八七）の『検地帳』に記され、矢神村（現十和田市）は享和三年（一八〇三）の『仮名付帳』に記され、大矢沢村（現青森市）は貞享元年（一六八四）の『郷村帳』に記されており、近世にはいずれも既に成立していたと考えられるものである。

また、矢ノ根森八幡宮については延享元年（一七四四）の『御領中産物（篤焉家訓）』に「矢ノ根石田名部佐井八幡又花牧より出ツ」と遺物の出土が記され、菅江真澄が当社に参詣した寛政四年（一七九二）には「やのねもり」⁽⁹⁾と既に呼称されていた点から、一八世紀中葉には県内でも「矢ノ根」の呼称が行われ、「矢ノ根社」と地名化していたと考えられる。

つぎに、天狗を冠する地名であるが、乳井の天狗平は、工藤白龍が寛政

二〇七年の『津軽俗説選後拾遺』に記しており、菅江真澄もほぼ同時期に訪れている。したがって、遺跡地名としての天狗平は寛政年間（一七八九―一八〇一）に既に成立していたわけであるが、天文年間（一五三二―一五五五）に成立したとされる『津軽郡中名字』⁽³⁷⁾には奥法郡の山之辺の地名として天狗平が既にみえている。

つぎに、立石等の地名であるが、立石村（現十和田湖町）が寛政年間の『封内郷村志』⁽¹⁰⁾にみえ、四ツ石村（現青森市）も貞享元年（一六八四）の『郷村帳』⁽¹⁰⁾にみえている。また、建石村は正保二年（一六四五）の『津軽知行高之帳』⁽¹⁰⁾に館石村とみえている。また、石神村（現青森市）も正保二年（一六四五）の『津軽知行高之帳』⁽¹⁰⁾にみえている。しかしながら、これらは必ずしも遺跡地名とは断定できないものである。

また、二ツ森貝塚に関してであるが、寛政年間の『封内郷村志』⁽¹⁰⁾に貝塚とみえており、一八世紀末には、既に成立していた遺跡地名と考えられる。

つぎに、洞穴に関する地名であるが、大穴村（現黒石市）が『黒石領御日記』の元文四年（一七三九）にみられ、岩屋村（現東通村）は天和二年（一六八二）の『惣領代官所中高村付』⁽¹⁰⁾にみられる。また、石倉村（現十和田市）は寛政年間の『封内郷村志』⁽¹⁰⁾にみえ、石倉沢村（現川内町）も享和三年（一八〇三）の『仮名付帳』⁽¹⁰⁾にみえている。このなかで、明確に洞穴遺跡として遺物が出土している東通村の岩屋は、近世前期には成立していた遺跡地名と考えられる。

つぎに、古代以降の製鉄・鍛冶関連の地名であるが、金屋村（現尾上町）が正保二年（一六四五）の『津軽知行高之帳』⁽¹⁰⁾にみえ、金矢村（現

六戸町）は寛政年間の『封内郷村志』⁽¹⁰⁾にみえている。また、金山村（現五所川原市）は正保二年（一六四五）の『津軽知行高之帳』⁽¹⁰⁾にみえており、金浜村（現八戸市）は元和三年（一六一七）の『南部利直下知状』⁽¹⁰⁾にみえており、いずれも一七世紀には既に成立していた地名と考えられる。

つぎに、盛土を伴う遺構に関する遺跡地名である。未発掘調査のものが多いので、構築年代が不明であるが、古代以降は間違いのない。

十三森村（現青森市）は貞享四年（一六八七）の『検地帳』⁽¹⁰⁾にみえ、九十九森村（現大鰐町）は安永三年（一七七四）頃の『行程記』⁽¹⁰⁾にみえている。上北町の十三社遺跡は古代から中世の遺物が発見されており、一部の十三森は古代一七世紀には成立していた遺跡地名と考えられるが、十三塚信仰と考えあわせ、中世以降のものである。また、九十九森は岩木町の荒神山遺跡の例をとると、調査の結果、十五世紀末一六世紀前半頃と考えられている。菅江真澄は、寛政八年（一七九六）、現青森市高田の九十九盛を通過しており、九十九森は一五・六世紀以降一八世紀末には成立していた遺跡地名と考えられる。

つぎに、丑盛であるが、天和年間の絵図に記されており、一七世紀には既に成立していた遺跡地名である。⁽²³⁾

長者関係の地名では、長者に関する文献が既に平安時代にみえており、鎌倉時代に入り物語化されるようである。県内では現八戸市の長者山に關して、寛保三年（一七四三）の『奥州南部糠部順礼次第集全』⁽¹⁰⁾に長者権現等の御堂があったとされ、長者久保村（東北町）も寛政年間の『封内郷村志』⁽¹⁰⁾にみえているので、一八世紀には地名化していたと解される。

長者に関する地名は、いわゆる長者伝説に関連して発生してきたと考え

られるが、全国的に同様な内容をもっており、各地で独立的に発生した地名ではないと考えられている。²⁵⁾ 県内では、中世と思われる城館跡に付される例も多く、中世―一八世紀には、大半が成立していたものと考えられる。

つぎに、蝦夷等関連の地名であるが、岩手・秋田県では終末期の古墳群に付される例が多く、本県では中世とされる城館跡に付される例が多い。また、前述したように、東通村の蝦夷穴（岩屋洞穴）では近世のアイヌ人骨が出土しており、地名との関連で考えるならば近世の遺跡にも付される例があり、菅江真澄も寛政五年（一七九三）に現六ヶ所村の「えぞやしき」を記している。³⁰⁾ 古代・中世において、えぞ等の文字は諸文献にみえるが、異民族たる蝦夷を一般人が広く認識するようになった近世に多用されるようであり、大半は近世以降に成立したものと考えられる。アイヌ関係の遺跡地名も、日本先住民族Ⅱアイヌ説が唱えられるようになった近世以降に成立したものであろう。

つぎに、中世と考えられる城館跡に由来するとみられる遺跡地名が県内一円に多数みられる。近年の発掘調査の進展により、年代的に平安末―近世初期の年代が提出されてきている。

本県の城館跡の遺跡地名は、古文献に出てくるものもあり、左に一部例示する。

岩館（楯） 沼館（楯） 石川館（楯）、持寄城（建武元年―一三三四）
藤崎城、平内城（延元元年―一三三六）、尻八館（楯）（暦応二年―一三三九）、船水館（楯）（貞和三年―一三四七）、柴館（嘉吉二年―一四四二）、狼倉館（享徳元年―一四五二）等、また天文年間の『津

軽郡中名字³⁷⁾』には、溝城・岩館・奥館・堀越・鄙館・宮館等。

ところで「〇〇館」のタテは一五世紀以前は「〇〇楯」と記されたものがあり、一五世紀以後になって、「〇〇館」を用いるようになってきたようである。

したがって、県内の中世とされる城館跡の遺跡地名は近世のものが大半と思われるが、一部が中世に成立していたと考えられる。そして、堀・溝等、館跡の主たる遺構についても、前述の『津軽郡中名字』に堀越・溝城（現常盤村の水木）があり、館跡等とはほぼ同時期に成立していた可能性が強い。

屋敷が付される地名については、館跡に付されるものも多く、大半は中世以降に成立したものと考えられるが、前田屋敷村（現田舎館村）は正保二年（一六四五）の『津軽知行高之帳』にみえており、¹⁰⁾ 高屋敷村も同書にみえていいる。小屋敷村（現黒石市）は明暦二年（一六五六）の『御知行割印形之控』（黒石領御日記）にみえ、¹⁰⁾ 小屋敷村（現鯉ヶ沢町）は貞享元年（一六八四）の『郷村帳』にみえていいる。また、新屋敷村（現木造町）は天和三年（一六八三）の『広須御新田所図』にみえ、¹⁰⁾ いずれも一七世紀には既にみえており、近世初期に成立していた地名も多い。

最後に「チュウシ」についてふれる。これについては、前述の『津軽郡中名字』³⁷⁾に「中深」とみえ、既に天文年間（一五三二―一五五五）に成立していた地名であるが、これがチャシあるいは茶臼と結びつく可能性も指摘されている。³²⁾ しかしながら県内のチュウシには城館跡があるが、北海道のチャシ関係の地名にはチュウシはなく、チュウシは別な解釈が必要であらう。

以上、県内の遺跡地名とみられるものの由来・成立年代について述べてきたが、青森県の遺跡地名の特色として、遺構の分布に関連するが、古代の遺跡地名がないことがあげられる。東北地方南部以南にみられる大和朝廷・律令社会に関連した、たとえば、前方後円墳等の古墳、さらに、古代城柵・条里制・国分寺・古代の氏族名等に関連する遺跡地名は欠如している。これに反し、西日本にはない蝦夷・アイヌ関連のものがみられるという点も特徴的と言える。

筆者が述べた遺跡地名については、すべての遺跡を踏査し、遺跡にまつわる説話・伝承等については調査したわけではないし、さらにまた、考古学以外の学問分野の専門的知識もない。したがって、複雑な歴史的・社会的背景の中で成立してきているはずの地名の解釈に当り、多分に独善的・短絡的な解釈に陥っている恐れがある。他の分野・立場からみれば、全く異なった見解も出てくるはずであるのは承知しているが、あえて考古学的立場から、遺物・遺跡と地名との関連について考察してみたわけである。

考古学の基礎調査である遺跡の分布調査には、遺跡地名に関する知識が大いに有用性をもつものと考えられる。先史時代のものも含められるが、とくに、中世以降に築かれた城館跡・塚などの各種遺跡の地名上の知識はきわめて有効であると思われる、さらに遺跡地名に対する関心・調査の向上により、新遺跡発見の機会は大幅に増加するものと考えられる。

本稿を終えるにあたり、清野謙次『日本考古学・人類学史』上巻（岩波書店 昭和二十九年）に負うところが大きであった旨、記しておきたい。

地名等には門外漢の筆者の原稿掲載にあたり、種々御配慮を頂いた弘

前大学の長谷川成一助教授に対し深く謝意を表する次第である。

【註】

- (1) 中谷治宇二郎『日本先史学序史』昭和一〇年 岩波書店
- (2) 本稿で使用する遺跡名および所在地・時代・出土遺物等は原則として、青森県教育委員会編『青森県遺跡地名表』（昭和五四年）によるものである。
- (3) 福田友之「亀ヶ岡文化研究略史」『考古風土記』第五号 昭和五五年
- (4) 本稿で使用する大字・小字名は原則として、青森放送株式会社編『新訂青森県地名辞典』（昭和五四年）によることとし、他の地名については、個別に〔注〕を付した。
- (5) 佐藤雨山・工藤親作編『浅瀬石川郷土志』 昭和五一年 歴史図書社
- (6) 本稿で使用する中世城館名と内容は原則として、青森県教育委員会編『青森県の中世城館』（昭和五八年）によるものである。
- (7) 松浦武四郎『東奥沿海日誌』（吉田武三編） 昭和四四年 時事通信社
- (8) 自然部門「津軽半島西北部山塊の自然調査概要」『青森県立郷土館調査研究年報』第二号 昭和五一年
- (9) 菅江真澄「牧の冬枯」『菅江真澄遊覧記』（内田武志・宮本常一編訳）第三卷 東洋文庫八二 昭和四二年 平凡社
- (10) 『青森県の地名』 昭和五七年 平凡社

- (11) 『角川日本地名大辞典 2 青森県』 昭和六〇年 角川書店
- (12) 『北海道駅名の起源』 昭和三七年 日本国有鉄道
- (13) 菅江真澄「雪のもろ滝」『菅江真澄遊覧記』(内田武志・宮本常一編訳) 第三卷 東洋文庫八二 昭和四二年 平凡社
- (14) 工藤白龍「津軽俗説選後拾遺」『新編青森県叢書』(二) 昭和四八年 歴史図書社
- (15) 菅江真澄「すみかの山」『菅江真澄遊覧記』(内田武志・宮本常一編訳) 第三卷 東洋文庫八二 昭和四二年 平凡社
- (16) 中道等『奥隅奇譚』 昭和四年 郷土研究社
- (17) 菅江真澄「おぶちの牧」、「奥の浦うら」、「津軽の奥」以下は『菅江真澄遊覧記』(内田武志・宮本常一編訳) 第三卷 東洋文庫八二 昭和四二年 平凡社
- (18) 天間林村『天間林村史』 昭和五六年
- (19) 「常陸国風土記」『風土記』上(久松潜一校註) 昭和三四年 朝日新聞社
- (20) 福田友之「津軽・相馬村大助発見の洞穴遺跡」『青森県考古学』第三号 昭和六一年
- (21) 鈴木政四郎『浜館町誌』 昭和四〇年
- (22) 七戸町『七戸町史』1 昭和五七年
- (23) 三沢市教育委員会『庭構(1)遺跡発掘調査報告書』 昭和六〇年
- (24) 平内町『平内町史』上 昭和五二年
- (25) 財団法人民俗学研究所編『民俗学辞典』 昭和二六年 東京堂、鏡味完二・鏡味明克『地名の語源』 昭和五二年 角川書店

- (26) 岩木山刊行会『岩木山』 昭和四三年
- (27) 岩木町教育委員会『荒神山遺跡発掘調査報告書』 昭和五六年
- (28) 尾上町教育委員会『丑盛の調査(第一次)』 昭和五八年
- (29) 鈴木尚・酒詰仲男・埴原和郎「下北半島岩屋の近世アイヌ洞窟について」『人類学雑誌』第六二卷第一号 昭和二七年
- (30) 「注」(17)の「おぶちの牧」
- (31) 青森県教育委員会「下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告書」 昭和五三年
- (32) 金田一京助「北奥地名考」『金田一京助選集』1 昭和三五年 三省堂
- (33) 知里真志保『地名アイヌ語小辞典』 昭和三三年 楡書房
- (34) 本章で述べる道・県の事例については左記の文献を利用した。
『北海道埋蔵文化財包蔵地一覧表』(北海道教育委員会編 昭和五一年)、『秋田県の考古学』(奈良修介・豊島昂 昭和四二年 吉川弘文館)、『秋田県史』考古編(秋田県編 昭和五二年)、『岩手の遺跡』(岩手県埋蔵文化財センター 昭和六〇年)、『宮城県史三四 史料集V考古資料』(宮城県編 昭和五六年)、『山形県史考古資料』(山形県編 昭和四四年)
- (35) 大迫町教育委員会『立石遺跡』 昭和五四年
- (36) 新潟県教育委員会『金屋遺跡』 昭和六〇年
- (37) 海保嶺夫編『中世蝦夷史料』 昭和五八年 三一書房

(日本考古学協会会員)
青森県教育庁文化課